SSTK 第59号

社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
〒279−0022 千葉県浦安市今川 1−14−52
TEL:047-304-8808 FAX:047-304-8821

パーソナル・アシスタンス ともの通信

いっしょに生きる
楽しく生きる

映画上映会＆トークセッション

社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも

20周年記念イベント 参加費無料

13:00 開場
13:30 開会

13:40 映画上映会

15:00 休憩

15:10 トークセッション

16:40 閉会

「ともに生きる」が問いかけるもの

- 映画監督 寺田靖範
- 日本社会事業大学 専門職大学院・准教授 曽根直樹
- ぶどう社（出版社） 市毛さやか
- とも理事長 西田良枝

他にも登壇者ありお楽しみに！

いのちって、どんなもの？ 生きるって、どういうこと？

創立 20 年。創設者の西田良枝さん自らが、「こんな思いを込めて＜とも＞を作った」と語る動画を制作。主人公は、娘の江里さん。「障がいがあっても地域の中で自分らしく暮らしたい」。この望みを叶えていく中で、江里さんは様々な問いかけを発してくる。たとえば、「いのちって、生きるって、あなたどう思っていますか？」というふうに。多くの方が本作で江里さんに出会い、彼女の問いかけに応じてくださることを夢見ている。

監督 寺田靖範

定員 200 名

2021 年 12 月 12 日（日）

開会：13：30 ～ 16：40
（開場 13:00）

会場：浦安市文化会館 小ホール

コロナ感染防止のため、マスクの着用、手指消毒の実施、検温にご協力をお願いいたします。体温が 37.5 度以上ある方は、ご入場をご遠慮いただきますので、改めてご了承ください。

パーソナル・アシスタンス とも

お陰様で創立20周年を迎えることができました

支えてくださったすべての方々、おひとりおひとりに感謝申し上げます

私たちの法人は、誰もがともに学ぶことができる地域、ともに心豊かに安心して生きることができる地域を目指し、市民活動「浦安共に歩む会」から始まりました。その理念は現在の社会福祉法人パーソナル・アシスタンスともの理念「誰もが心豊かに、安心して、その人らしく共に暮らせる地域社会の実現」と実践につながっています。

「浦安共に歩む会」の活動は浦安市において、障がいがある子どもと保護者が支援を受けながら、希望する学校を選択できることを可能にし、市内のいたるところで障がいのある子どもとない子どもたちが共に学び、育ち合っている姿を見ることが出来ました。

そこには保護者を含めた市民の助け合いがありました。みんなが他人事ではなく、自分事として受け止め合える風が吹いていたような気がします。

私たちは障がいを持ったり、生きづらさを感じている子どもたちにも、地域の中でかけがえのない存在としてともに幸せに生きていってほしいと願いましたが、社会資源はほぼ何もありませんでした。子育て支援も不十分な時代。それならばと、私たちは福祉制度の幹を太くし、事業やサービスをつくるために行政や政治に働きかけながら、自分たちができることを民間事業所として行おうと事業を立ち上げました。それらの実践が実を結び、社会制度が充実したことで、障害福祉も高齢福祉も児童福祉もたくさんのサービスができました。

20年間、私たちは財源や物理的な制限のある中で、地域の人達とともに生きること、支援が必要な人たちが同じ社会に存在していることなどを、事業を通して発信出来るように、知恵を出し合いながら行ってきました。

20年経った今、あれだけ充実してほしかった制度やサービスが見えない壁となり、障がいがある人とない人が関わりあい、助け合い、笑い合いながら共に生きる地域の風景が、残念ながら少なくなっているような気がしています。福祉は専門家が行うサービスに任せておけばよいとなったら、支援が必要な人たちは見えない壁の中に囲われて、私たちの望む「ともに生きる」から離れてしまいます。

福祉事業を担う私たちが、見えない壁になることがないように、支援の在り方、事業の在り方、法人の在り方を見直し、これからも「とも」の理念の根幹である「ともに生きる社会」に向けてさらなる努力を重ねて行きたいと思います。

どうか、今後ともなお一層のご理解とご協力、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

西田良枝

新しい門出 ～ともと私～

早いもので、私が「とも」に入職して10年が過ぎ、この10月に68歳で勇退、新たな人生を踏み出しました。振り返れば2011年春の入社で内定を頂いていたものの、3月の東日本大震災により「とも」の社屋も壊滅的な被害を受けた中で、シニアの新人の採用どころではないだろうと思っていたのですが、盛大な入社式をもって迎えていただきました。大変な状況下にあっても「こういう時だからこそ、やらねば」という西田代表の強い思いを受けて、職員が一丸となって準備に奔走し執り行われたとのことで、法人の力強さと団結力に驚嘆させられたものでした。

入社後も、この力強さは随所で感じさせられました。仮の拠点にあって物資も十分でない中、被災前と変わらぬ支援の継続をするのだという強い思いを持った先輩方の背中を追って、粉塵が舞い、水溜りができた市内を昼夜を問わず自転車で回ったことが鮮明に思い出されます。また、困難な状況の中、その後のイベント等も淡々と進められ、特に設立10周年記念行事の開催は、職員の士気の高揚は元より、関係者や当事者の信頼を深め、安心を提供できたという点で大きな意味をもつものでありました。これらのことが私のともでの勤務の指針となり、多くの仲間の助けもあって、これまで頑張って来れたのだと思っています。10年間での多くの出会いと様々な経験を通じて信念として得たことは「ともに生きること」の大切さです。ひとりだけのしあわせはあり得ません。誰もがその人らしく、心豊かに暮らし続けられる地域づくりのために「とも」は前進して行くと確信しています。これからも頑張れ「とも」！

今年「とも」は創立20周年を迎えます。ちょうど区切りとなる期間を、無事に勤め上げることができ安堵しています。本来であれば、関わって下さったすべての方々に直接のご挨拶と御礼を申し上げるべきところですが、ご無礼ながら本紙面をもって代えさせていただきます。本当にありがとうございました。

K・M

職員寄稿

～ともの来た道、「とも」と行く道～

ひとりひとりに合った質の高い支援を繋ぐ

私は新卒でともに入職して、パーソナルケアセンターでヘルパーとして勤務し、今年で14年目になります。特に医療的ケアが必要な利用者さんのケアに長い時間関わっています。

パーソナルケアセンターの仕事は、利用者さんの生活の中にヘルパーが入って支援したり、余暇支援で一緒に出かけたりしますが、ただ言われたことをやったり、一緒に楽しむだけではありません。言葉にならない利用者さんが発信する本当のニーズをくみ取ってその人らしい生活ができるような支援に繋げたり、行く場所にベッドがあるか、車椅子対応であるかなど、利用者さん一人ひとりの特性を理解して必要な事前準備をすることもヘルパーの大事な仕事です。利用者さん一人ひとりにあった支援をするということは大変なことと思われるかもしれませんが、自分らしく生活したいという思いを支えることは、私にとって「ごく普通のこと」と感じています。

そう心掛けていても失敗はあります。利用者さんに迷惑をかけてしまったことも何回もありました。できない自分が悔しくて泣いたこともあります。でも、その失敗が成長に繋がり、今の私がいると思います。

旅行先でのケアは、自宅にはあるものが宿泊先にはなかったりするので、そこにあるもので代用したり、ご当地の味を楽しんでもらいたくて利用者さんが食べられるようにペースト食にしてもらったりと、理事長がいつも職員に伝えている「できないではなくどうしたらできるか考える」ということを心に留めて支援しています。利用者さんが美味しそうに食べていたり、温泉に気持ち良さそうに入っていたりすると、私も嬉しくなります。

この数年、私はこういった喜びを仲間達と共有したり、意見を交わすことで支援の質をよりいっそう高め、それらを後輩たちへも繋げようと努力しています。

その成果は少しずつ現れてきているようで、後輩たちがともの理念を実践したエピソードを話してくれたり、私たちが伝えた事を役立てながら支援をしているのを見ると嬉しく思います。これからもよりよいケアを心掛け「とも」の想いと支援を次世代へ繋いでいこうと思います。

H・K

職員寄稿

～ともの来た道、「とも」と行く道～

人をつなぎ、地域を作る

私が障がい福祉の世界で働こうと思ったのは、従弟が家族と離れて長年施設で生活している姿を見て、「地域で皆一緒に生活する、そんな当たり前のことがどうして難しいのだろうか」、そう思ったことがきっかけでした。様々な事情があったことは理解していますが、会いたい人と会いたい時に会って、好きな事をして過ごす時間が、障がいがあるなしに関わらず、誰にとっても大事なのではないかと感じた私は、そういう地域を作っていく一員となる仕事をしたいと思ったのです。

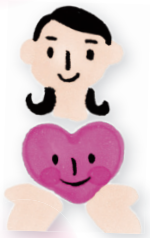
そして今、地域福祉を実践している「とも」に入職し、それぞれの望む形で地域で暮らす利用者さん達と触れあうなかで、「やっぱり、あの時私が感じた感覚は間違っていなかったんだ」と思いました。

私は支援員と相談員という立場で、沢山の利用者さんと関わらせていただいていますが、多くの利用者さんが「これからも浦安で暮らしていきたい」という事を話してくれています。

中でも私が印象に残っているのは、難病のKさんという女性です。彼女は、「最後まで自宅で過ごす」という事を諦めず、地域で暮らす努力を続けており、その思いを実現させようと、多くのヘルパーや訪問看護、往診医等、様々な専門職達がチームを組んで、彼女の生活を支えていました。私はKさんと関わり始めた当初、既に出来上がっている支援チームの中で、相談員として出来ることは少ないのではないか？と思っていたのですが、支援させていただく中で、そうではないという事に気づかされました。あたりまえの日常を続けるために、制度を活用し、支援チームを円滑に動かし続けていくことが、難病をかかえた彼女の地域生活において大切な事であり、その役割を担うのが相談員だという事を、Kさんの支援を通して教えられたのです。

住み慣れた地域で皆一緒に生活する、そんな当たり前が「当たり前」になるよう、これからも日々の支援に精一杯取り組んでいきたいと思います。

T・M



社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも ご寄付のお願い

社会福祉法人となっても、その財源は今までと何も変わらない現実です。皆様からの寄付は現在行っている社会福祉事業に役立たせていただきます。皆様のご協力をお願いいたします。なお、「とも」への寄付は、以下の税制上の優遇措置があります。

◆個人の方は、所得税に係る「寄付金控除の対象」になっています。

◆法人の場合は、一般の寄付金とは別枠で損金の額に算入することができます。

◆相続や遺贈によって受けた財産を寄付した場合は、その分は相続税の対象外となります。

寄付金振込先

京葉銀行　新浦安支店　普通口座　5429331
口座名義：社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
理事長　西田良枝

パーソナル・アシスタンス
とも

編集人：社会福祉法人 パーソナル・アシスタンス とも
〒279－0022 千葉県浦安市今川1－14－52

＜編集後記＞

多くの障がいのある人が活躍したパラリンピックも終わり、あっという間に秋の気配。

多様性を包摂する世界が一時の幻に終わらないように一人ひとりができることを考えていきたいですね。【S】